



第 50 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成16年4月20日

CONTENTS

私の読書遍歴 (7) 教訓のことば特集 その2	機能高分子学科	近藤 慶之	(2)
分館通信 告知板			(11)
分館日誌			(12)
編集後記			(12)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

私の読書遍歴

(7) 教訓のことば特集、その2

機能高分子学科

近藤 慶之

今年オリンピックイヤーです。8月にはアテネで若者のスポーツの祭典、第28回オリンピックが開催されます。日本からも多くの選手達が金メダルを目指して熾烈な戦いが繰り広げられ、代表選考会も熱気をおびてきました。金メダルが期待される女子のマラソン、レスリングをはじめ、柔道、水泳、野球などなど枚挙にいとまがありません。私は、第18回の東京オリンピックの年(1964年)に繊維学部赴任しましたので、今回は数えて11回目になり、奉職してこの4月から41年目に入りました。

昨年5月、小学校の恩師宮崎直先生が膵臓癌のため逝去されました。享年78歳であった。平成15年4月1日に日本分光創立45周年記念祝賀会で祝辞を述べられる時の写真を拝見するたびにとても悲しい思いにかられて涙がこみあげてくるのをとめることができません。昭和44年に代表取締役社長に就任し22年間社長として日本分光およびグループ会社を育てることに精魂を注ぎ込む姿を知っていますので、とても頭の下がる立派な恩師でありました。その間数々の賞(大河内記念技術賞、科学技術長官賞、藍綬褒賞)を受賞され、高校の大先輩でもあり、とても誇りに思います。

大先輩と言えば日大医学部長から総長になった瀬在幸安先生が今も総長二期目の現職で活躍しておられる。昨年も屋代高校80周年の記念行事にもお見えになり記念講演をされているのが印象的です。2003年、12月30日の信毎に“グローバルな大学に”の記事がのっていました。“全学問領域をカバーする真の総合大学が求められていると思う”。瀬在総長さんの家はお父さんが開業医で親族に医者が多く、兄も従兄弟も二人の伯父さん達も医者だったようです。人工心臓弁の開発では世界のトップを競っていると自負しています。「信州教育」にもふれ、「忘れないで欲しいのは、信州は人間が生きるに値する大地だということだ。この素晴らしい自然のなかで人間の教育をすること、教育を受けることの意味を大事にしてほしい」と言っています。ただ名前だけ“長野県”から“信州県”に変えても特別に意味を持つことはないでしょうね？

2003年3月に信濃毎日新聞にはノーベル物理学賞を受賞された“小柴先生ど

う思いますか？”と題した記事が上・中・下の3回にわたって連載されました。

“くよくよししないで、できること考えた”。

中一でポリオ（小児まひ）にかかったとき目の前が真っ青になった時の心境を語っています。

“先生が楽しいと思うことを教える”。

学習意欲低下の対応としてとても興味の引かれることを言っています。

「一番いい手は先生が教え子達に好かれることだ」と言う。

どうすれば好かれるかという、先生が『自分の教える教科を楽しいな』と
思っ^てやることだ」と言う。「そうすれば、子供たちはピンと感じて、その教科
に興味を持ちますよ。『そんなに面白いことなら、やってみよう』という気にな
る」と。“工夫する楽しさを味わう機会を”

能動的認識の大切さを東大の卒業式で言われたようです。学校では（知識を
覚える）受動的認識が評価されるが、実社会では（自分で考える）能動的認識
が必要とされるとし「これまでの成績が良かったから、これからも大丈夫だろ
うというのは通用しません。」と述べられたそうです。さらに、「受動的認識力
と能動的認識力の掛け算で、人間の総合的な能力が決まるように思う」と語っ
ています。

現在の教育の欠陥をついているように思います。生徒が「自ら学び、自ら考
える力」を重視する教育改革と方向性が問われているように考えます。

最近のトピックスからサイエンスを中心に心に残る言葉（苦労話）について
ふれてみましょう。

新超電導物質を発見して話題になった秋光純先生（青山学院大学 教授）は
より実用に向く物質を探し続けて20年以上になるそうです。“新発見にこだわ
るのは、ちょっとした工夫やアイデアがそれに結びつく喜びを学生に知って
ほしいから” “しばらく論文がでなくてもいいから全く新しいことをやろう” “ね
ぱり強くやっていると、運もひきこめるはず”

これらの言葉はとても感心させられるもので“穴があったら入りたくなる”
心境にかられますが皆さんはいかがでしょう？

さらに、成功の秘訣は“根性×アイデア×運”（掛け算であることがポイント）

別の言い方をすれば“アイデア×人×金”（IMM）でしょうか。

2004年3月13日の信濃毎日新聞“時の顔”に名古屋大学大学院の小林^{たけし}猛先生
の記事が出ていました。このアイデアは磁性を持つ酸化鉄粒子を患部に送

り込んで磁場を当てると電子レンジの原理により急速に温度が上がって、がんを焼き殺すという大胆な発想です。最近このようなナノテクノロジーを利用したがん治療法の実用化に向け、大手製薬会社などと共同でベンチャー企業「ナノセラピー研究所」を設立されたそうです。がん細胞に入れる酸化鉄の微粒子は直径十ナノメートル（十万分の一ミリ）。これが43℃以上に加熱され、がん細胞を殺傷する仕組みです。

最初のがん学会では冷遇されていたが、論文を30本近く発表し新事実を明らかにするにつれて注目されるようになったそうです。

先生いわく「時代に合わせて研究領域を変えることをおそれず、常に最先端に飛び付く方が面白い」。仮説が間違っているでも「次はどうしよう」と考えるのが楽しみだそうです。これからの若い研究者に小林先生の爪の垢を煎じて飲ませてあげたい心境です。

先人の教訓のことばを五つ

- ・ 教育はすなわち人に独立自尊の道を教へて、

これを躬行実践きゆうこうじっせんするのは工夫ひらくを啓ひらくものなり。

(福沢諭吉)

↳

口で言う通りを、みずから 実際に行うこと

- ・ 自尊、自知、自制、この三つのもののみが人生を最高さいこうの力へ導く。

(テニス)

- ・ 人に教ゆるに行を以てし、言を以てせず、事を以てせず。

(乃木希典)

- ・ 人間は一本の葦あしにすぎない。自然のうちで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。

(パスカル)

- ・ 最も難しい三つのこと—秘密を守ること、他人から受けた危害を忘れること、暇な時間を利用すること。

(キケロ)

標語のいくつかをあげます。

めぐり合うた
よろこびこそ
生きたよろこびである

〔 The joy of encounter is the joy of living. 〕

自分で
自分の始末を
つけ得ないのが
人間の悲しさである

〔 Our sadness is that
we cannot look after ourselves. 〕

善人も悪人も
ひとしく
求道の親しい友である

〔 People both good and bad are
equally close friends when seeking the Way. 〕

私は
死ぬまで
煩惱具足の
凡夫です

〔 Until die, I'll just
be an ordinary person full of desire. 〕

ここで、ちょっと一休みとして金子みすゞ童謡集（角川春樹事務所, 1998.3）の中から「夢」に関する詩を入れましょう。

「ながい夢」

きょうも、きのうも、みんな夢、
去年、一昨年、みんな夢。

ひよいとおめめがさめたなら、
かわい、二つの赤ちゃんで、
おっ母ちゃんのお乳をさがしてる。

もしもそうなら、そうしたら、
それこそ、どんなにうれしかる。

ながいこの夢、おぼえてて、
こんどこそ、いい子になりたいな。

「夢と現」

夢がほんとで
ほんとは
夢なら
よかるうな

「夢から夢を」

一寸法師はどこにいる。
一寸法師は身がかるい。
夢から夢を飛んで渡る。

そして昼間はどこにいる。
昼も夢みる子供等の、
夢から夢を飛んで渡る。

夢のないときや、どこにいる。
夢のないときや、わからない。
夢のないときや、ないゆえに。

幸福をめぐる本は数多くありますが、どれを読んでも難し過ぎて分かりにくいのが印象に残ります。

ヒルティ、アラン、ヘッセらの「幸福論」は有名ですが、福田恆存さんの「私の幸福論」(ちくま文庫)、梅棹忠夫さんの「わたしの生きがい論」(講談社文庫)は少し分かり易くて消化できそうである。

ところで、最近「文藝春秋」新幸福論、ほんとうの幸せとは？(平成13年、9月臨時増刊号)が出版されました。全編書き下ろしで123人の「自分らしく生きるヒント」がのっています。五木寛之、曾野綾子、柳田邦男らの作家を中心に、各界で活躍されている著名人が、それぞれの立場で、ほんとうの幸せとはなんぞや？を語っています。

1997年12月に「日本人のこころ」原風景をたずねてが岩波書店から出版されました。

思想家の鶴見俊輔さんが編者で、佐藤忠男(映画評論家)、永六輔(放送タレント)、四方田犬彦(文化論者)、池澤夏樹(作家)、さん達が映画、歌、漫画、物語を通して、日本文化の特色を対話形式により日本人のこころを述べていて必読する価値があります。

椋鳩十さんといえば信州を代表する動物文学作家として有名です。“本によって情緒をつくる”を強調された椋さんは「見る、聞く、読むは人間の心をつくる3大要素」であると述べています。詳しくは「お母さんの声は金の鈴」椋鳩十の母子論(あすなろ書房)をお読み下さい。

「楽しく、感動ぶかい思い出とともに植え込まれた母の声はいつまでもいつまでも、金の鈴のごとく、美しい声として、子どもの心の中に鳴りつづけるのです。こういう母の声を、心にしっかりとつ子どもは、学校暴力や家庭内暴力とは縁のない子どもたちとして育っていくにちがいません。」と述べています。

1998年3月に講談社から「生きることはすごいこと」が発刊されました。すぐに買ってざあっと目を通していたのですが、最近ようやく完読までこぎつけたので認めてみたい。作者は画家の安野光雅さんと臨床心理学者である河合隼雄さんの共著であります。

安野さんは欧米でもアノー(ANNO)の名で知られ、河合さんは日本にユング派心理療法を確立させたことで知られ著書も多数あります。

二人は硬直した「常識」を少しほぐしたいと意気投合し、今の世の中には「常

識でない常識」がまかり通っているところがあって、それを信じて不幸になったり、損をしている人があまり多いので、もう少しそのあたりを掘り返して考えなおしてみる必要があるのではないかと強調しています。家族のこと、子どものことなど人間味あふれる心の問題を書かれていて、ごく普通のことばと文章ですので、二、三日で読めます。一読をおすすめしたい。

人間の体を作っている生体成分として何一つとして不必要なものはありません。なかでもこの臓器がなかったら生命の維持が保てませんといえば、「脳、心臓、肝臓」の三つが必須の臓器でありましょう。

この本はまさに「脳」に匹敵する豊かな心を造出する司令塔のようなものと位置づけたい。

講談社からでているおすすめの一冊を紹介したい。1995年12月に出版された“「信頼できる人」といわれたい”です。著者は斎藤茂吉の息子の斎藤茂太さんと、松高出身で信州にも馴染みの深い北杜夫さんは弟であることはご存知の人も多いことでしょう。

精神神経科斎藤病院の名誉院長で、1916年生まれですから米寿（88才）になられまして、著書も数多くあります。

「信」のない人は豚や魚に笑われる。信頼の始まりは、まず自分を信じること。「友情」は信頼という山脈の上に育つ。良寛さんのように生きたい。などなどの教訓のことばがピラミッドのように山積しています。多分、今回のテーマの心臓部に値します。

三つめは肝臓部の書にふれたいピカーの本があります。

1992年11月に徳間書店から出版された井深大著「胎児から」、『知』から、『心』へ、21世紀への人づくりをあげたい。

井深さんは1908年に栃木県に生まれ、1946年にソニーの前身である「東京通信工業」を創立、1950年に社長に就任し、同社をあっという間に世界の「ソニー」に育て上げ、その後、1969年幼児の早期教育に着目して「幼児開発協会」を設立して活躍され、1992年に文化勲章を受章された立派な日本人の鑑ともいわれている人で、何年か前に、89才の天寿を全うされて鬼籍に入られました。

この本は10年位前に、私の姪が出産を前に読んでいたので、お借りして目を通し、なかなかの本であることを確認し、8年前に出た第四刷を買って“味読”してみました。

- ・ 遺伝子は人間の「心」を語れるか
- ・ 生まれてからでは遅すぎる
- ・ 「環境」としての母親
- ・ 母と子のスーパー・コミュニケーション
- ・ なぜいま「胎児」なのか

世界の著名な 22 人の出版物を参考文献にして書かれた名著と考えられます。
最後の四行にわたる文章がとてもすてきで感動してしまいました。

“私は本書において、胎児に始まり育児の重要さを、声を大にして述べてきました。だがここにきて思えば、私がこれまで主張してきたことは、結局のところ、地球の現状と人類の未来についての危機感から発したことでした。胎内の宇宙が健全であれば、地球もまた健全であると私はいいたいのです。”

おわりに、好きな「座右の銘」を一つ。

「道にためらわず、目標を見失わず、常に努力し、常に歩み、常に前進していきなさい」(アウグスチヌス)

好きな「四字熟語」を五つ。

光風霽月
 りどかな風と
 はれた月
 心のさっぱりと清らかな
 形容

泰然自若

大事に当ても落ち着いて少くも
動かない様子

虚心坦懐

先入観を持たないすなわな態度
わだかまりを持たない心

堅忍不拔

つらいこともがまん強く耐え心を
動かさぬこと

貧実剛健

かぎりなくたくましくいこと

今回をもって本稿をしめさせていただきます。

(おわり)

《编者注》

・新聞閲覧室(図書館2階)に『信濃毎日新聞』のバックナンバーを保存しています。自由に閲覧できますので、文中で紹介された新聞記事をご覧になりたい場合など、どうぞご利用ください。

・先生のご厚意で、希望者にはご紹介の図書をお貸しくださるそうです。失礼のないようお願いします。また、図書館でも購入を予定しています。後日、展示・貸出を行いたいと思いますので、楽しみにお待ちください。



⇒ 平成16年度 係員職務分担

平成16年度における係員の職務分担は次のとおりです。

担当者	内線	e-mail アドレス	職務分担
内海係長	5313	utsumih@shinshu-u.ac.jp	分館事務総括
清水幸直	5016		備付機器等保守
渡辺彰宏	5016	jfc2101@shinshu-u.ac.jp	雑誌(購入・製本)／目録(雑誌) 別刷
武居総子	5015	ftakei@shinshu-u.ac.jp	図書購入／目録(図書) 文献複写(受付)
滝口智子	5015	jfc0200@shinshu-u.ac.jp	文献複写(依頼)／現物貸借 情報システム管理

* 図書館の利用案内、資料の所蔵確認、各種データベースの検索方法などについては、係員全員が担当しますので、お気軽にお尋ねください。

* 人事異動により、繊維学部分館のためにご尽力いただきました濱主任が転出、川西係員が退職されました。4月からは新たに2名のスタッフを迎え、より一層のサービス向上に努めてまいりますので、今後ともよろしく願いたします。

⇒ 図書館2階の様様替えを行っています

- ✿ 学生閲覧室(2階西側)と雑誌書架(2階東側)の間にある扉を開放しました。これにより、あらためて階段を上り直すことなく、それぞれのフロアを行き来できるようになりました。
- ✿ 新着外国雑誌を全て南の窓際に移動するなど、雑誌の並べ替えを進めています。また、書庫狭隘化のため別置されている製本雑誌を、なるべくまとめて配置するよう作業中です。
- ✿ 書架の移動などで空いたスペースに机を設置して、閲覧席の増加を図っています。

分館日誌

(12月～3月)

- | | | |
|------|-------------------------------|-------------------|
| 12/9 | 館長・副館長会議(第4回)
[附属図書館会議室] | 出席者—三浦分館長
内海係長 |
| 1/6 | 学術情報・図書館委員会(第4回)
[SUNS] | 出席者—三浦分館長
太田委員 |
| 2/9 | 学術情報・図書館委員会(第5回)
[SUNS] | 出席者—三浦分館長
太田委員 |
| 3/10 | 図書委員会(第3回) | |
| 3/22 | 全学図書関係係長会議(第3回)
[附属図書館会議室] | 出席者—内海係長 |

編集後記

今年は、新2年生を迎えるのと同時に桜が満開になりました。研究室の歓迎会もあちこちで開かれていて、キャンパス全体が新しく何かが始まる活気にあふれていました。(大学自体も「国立大学法人信州大学」として生まれ変わりました)

さて、今号をもちまして、1997年4月からスタートした近藤先生の連載が最終回を迎えました。毎回楽しみにしておられた方も多いのではないのでしょうか。長期に渡るご寄稿に対し、この場をお借りして先生に厚く御礼申し上げます。また、バックナンバーをネット上で公開していますので、この機会にぜひご覧ください→ <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html>

次号は8月発行の予定です。利用者の皆さんの声もLibraryに掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せください。係員に直接、またはE-mailでの寄稿もお待ちしております。E-mailアドレスは、jfg0100@shinshu-u.ac.jpです。